

Computer Report

Vol. 51 No. 9 9月号 (通巻 684号)

はじめの言葉

■国民が政権交代を選択して2年が経過した。新しい首相は3人目となる。安定した政権交代とは、とても言えない。日本というコップの中の争いをしている間に、周辺諸国から様々な圧力をかけられている。中でも、もっとも気分の悪いのは、中国およびロシアの領土侵犯問題である。軍事力を背景にした圧力だと言っていい。一世紀前の帝国主義の再現だとも言えよう。弱り目に祟り目という。注意したい。

■飼料が放射性物質で汚染されたため出荷停止命令を受けていた食肉牛が、一部の地方ではあるが出荷の停止が解除された。依然として、停止されたままの地域もある。これを受けて菅前首相は「脱原発」「再生エネルギー」を打ち出した。新首相はどう対処するのだろうか。同じ政権政党でありながら、施策となるとまったく先が読めない。大震災復興を目指す日本だが、挙国一致できない理由のひとつと言えよう。

■食糧問題、エネルギー問題は、国の根幹をなすテーマである。国民生活および全産業のインフラである。このインフラ政策がフラフラでは困る。食用牛だけでなく、あわてて主食である米の放射線汚染の実態調査が始まったが、しっかりとやってもらいたい。再生エネルギーについても、口先だけでなく意味をよく考えて進めて欲しい。新首相には、これまで進めてきた原子力輸出政策との関連も十分に加味してもらいたい。

■再生エネルギーと一口で言うが、周囲の入れ知恵や思い付きでモノを言った前首相には、風力や水力くらいしか頭になかっただろう。実は原子力「もんじゅ」も再生エネルギーだということである。また、化石燃料の問題を考えたらトリウム熔融塩炉という、より安全な原発の存在も考えるべきだろう。掛け声だけの再生エネルギー、脱原発ではなく、具体的に代替案と推進案を示すことが国の舵取りである。

■ちなみにトリウム熔融塩炉は、やっかいなプルトリウムの発生量が軽水炉の500分1である上に、炉の構造からセシウムなど放射性物質の拡散を防ぎやすいともいう。もちろん、克服すべき新たな課題もあるだろうが、「脱原発」の掛け声ひとつで、大きな可能性のあるエネルギー研究の取り組みすべてを思考停止にしてしまうのは、いかがなものだろうか。新首相の熟慮と英断に期待したい。

■そもそも、原発設計第一世代とも言える福島第一原発を、延々40年も使い続けてきたことが問題である。言い換えれば、40年前のテクノロジーのまま停滞していたということだ。コンピュータ年齢で言えば、何世代の基礎テクノロジー革新があったことか。40年前に開発のコンピュータシステムがそのまま使われている例はないだろう。日進月歩の現在、このこと自体が恐るべき事である。東電はじめ関与してきた関係者の怠慢の証である。

■トリウム熔融塩炉の存在のように、原発の分野でも日進月歩はあったはずである。専門家は知っていたに違いない。知っていながら伏せてきたこと、主張する人を抹殺してきた背景も問題である。古いテクノロジーの原発権益に群がる原子力ムラの面々のためだろう。その延長線上に、次々と明らかにされているヤラセ疑惑シンポジウムもある。そこに暗躍してきた様々な勢力が、これに加担してきた。新政権に期待したい。(藤見)